

ひと

東京で育ち、北海道には縁がなかった。名寄市が中心の北海道上川北部地区は精神科の医師不足と病床減が深刻で、同市立大教員になる知人から6年前、名寄に精神科診療所を開くよう勧められた。「同じ国民なのに、なぜ同じ医療が受けられないのか」と言われ、心が動いた。

JR名寄駅前の廃業したパチンコ店を市の援助で改装。07年春、東京の大学勤

日本最北の精神科クリニック院長

阿部 恵一郎さん(62)



専門は非行・犯罪精神医学。国立児童自立支援施設や刑務所勤務を経て、創価大教授として心理学を教える。

務の傍ら、隔週木曜日曜限定で開業した。

それまで、旭川市より北には公立病院の精神科はあるが、心が不調になった時気軽にかけられる精神科クリニックはなかった。うつを中心にさまざまな人がやって来た。認知症の93歳から不登校になった6歳まで。100歳以上離れた町から来る人もいて、1日約100人を診察する。だが、人口減と高齢化の中、連携する福祉や教育も弱り、「全国並みの当たり前の医療」を提供する道は険しい。

当初、地域の自殺率は全国平均の2倍を超えていた。町の人が「自殺に鈍感になった」と話すのを聞いた。患者にも死なれた。診察室だけでなく講演や地域のFMを通じ「自殺防止を呼び掛け続けた」。09年以降、ようやく下火になった。名寄の5年間を先月、「精神医療過疎の町から」(みすず書房)にまとめた。今後も「目の前に患者がいれば、淡々とできることをする。死ぬまでやめられない」。氷点下30度近い日もあるが、地域のひととの間に生まれた「縁」が心を温めてくれる。

文と写真・青島顕